

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために」
(平成 27 年度第 2 回研究会)

日時：2015 年 10 月 3 日（土）14:00-18:30

場所：AA 研マルチメディアセミナー室（306）

・佐久間寛（AA 研所員）

「プレザンス・アフリケーヌ誌目録の構想と初期の概容（1955-1960 年）」

・小川了（AA 研共同研究員，東京外国語大学）

「Hosties Noires に至る道 B.ジャーニュと W.E.B.デュボイスから L.S.サンゴールへ」

コメンテーター：佐々木祐（AA 研共同研究員，神戸大学）

・打ち合わせ（全員）

概要

第 2 回研究会を上記の日時に開催した。以下、概要を報告する（敬称略）。

まず当初の予定から 2 点変更があった。1 つは「打ち合わせ」を最初に行ったことである。もう 1 つはコメンテーターの佐々木祐が校務で急遽出席できなくなったことである。ただし、報告に対するコメントを事前に受け取り、これを代読する形で議論が行われた。

打ち合わせについては、第 3 回の日程および本共同研究期間に開催を予定する国際研究集会について話し合われた。

その後、中村隆之の司会のもと、2 つの報告が行われた。最初の報告は佐久間寛による報告「プレザンス・アフリケーヌ誌目録の構想と初期の概容（1955-1960 年）」である。以下、その要旨を引用する（佐久間執筆）。

『プレザンス・アフリケーヌ』はあと 2 年で刊行開始から 70 年の節目を迎える。学際的・超域的なこの雑誌の共同研究を迅速に推し進めていくうえでは、各巻・各論文の概容把握と資料へのアクセスを効率化するデータベースの構築が不可欠といっても過言ではない。その予備的段階として、本発表では、『プレザンス・アフリケーヌ』の第二期刊行がはじまる 1955 年から、アフリカ諸国の一部が独立を遂げる 1960 年——いわゆる「アフリカの年」——までを対象とした電子目録を公開するとともに、具体的な活用例として、この時期における誌面の構成の推移を、フランス語圏西アフリカを対象とする文化人類学研究の視点から考察する。当日は参加者から目録の内容や利便性に関する意見を募り、これを踏まえて、本格的なデータベースを構築するためのガイドラインを策定する計画である。

当日は、以上の論旨のもとに『プレザンス・アフリケヌ』全目録の試作版が配布された。また、アフリカ・カリブ知識人とフランスの人類学をめぐる関係を意識したところから、エメ・セゼールが第1回黒人作家・芸術家会議の講演「文化と植民地支配」においてマルセル・モースの「文明」概念に依拠したことについての考察がなされた。

続く報告は、小川了が「Hosties Noires に至る道 B.ジャーニュと W.E.B.デュボイスから L.S.サンゴールへ」という表題のもと、下記要旨に基づく報告を行った（小川執筆）。

1971年4月にダカールで開催されたネグリチュードに関するセミナーにおいてサンゴールは論考を発表している（*Problématique de la Négritude, Présence Africaine, No. 78, 1971, pp.3-26.*）。そこにおいてネグリチュードの「真の父はデュボイス」である旨発言し、その上でアメリカ黒人にとっての問題と、アフリカ黒人の問題の違いについて、前者は数世紀にわたる白人による奴隷制を経験しており、したがって黒人の解放が重要であるのに対し、フランス領植民地におけるアフリカ黒人は「同化」政策によりアフリカ人としての独自の文化、人間性そのものまでも否定され、その意味でアメリカ黒人とアフリカ黒人の問題は相似しているとする。他方で、サンゴールはこの論考においてもブレイズ・ジャーニュについては触れぬままにしている。

本報告では、W.E.B. デュボイスの考え方、特に彼のあからさまなフランス信奉の姿勢、B. ジャーニュという人における「同化」の様態などの考察を通して、同化のあり方について考える。その上で、サンゴールの詩集 *Hosties Noires* は第一次大戦後にヨーロッパのみならず、世界の白人諸国で取りざたされた *Honte noire* という言葉への「叛逆」からきているものであり、その意味でサンゴールが口にせず、また書きもしていないことであるが、彼の思想の背後には B. ジャーニュがいることを示そうと思う。

これを受けて、佐久間による佐々木のコメントの代読ののち、議論がなされた。佐々木が提起した「同化」の問題（ジャーニュの行動を「同化」という観点だけで捉えることができるか）、サンゴールの詩集のタイトル *Hosties Noires* の訳語の解釈、それに関連するジャーニュによる「セネガル兵」徴兵（なぜ徴兵を拒んできたアフリカ人が一挙に徴兵へと駆り立てられたのか）、サンゴールの評価などをめぐって、活発な質疑と議論がなされた。

研究会は18時50分頃に終了した。なお今回は共同研究員をふくめ、14人の研究者が参加した。

（文責：中村）